



ハイライトよねやま 129

1 寄付金速報 一米山月間の成果に感謝！

10月までの寄付金は前年同期と比べて6.0%増、約2,910万円の増加となりました。普通寄付金は前年とほぼ同額(+0.03%)ですが、今期に入って初めて前年同期を上回りました。また、特別寄付金は10.8%増でした。

10月は米山月間ということもあり、5人(うち2人はご夫妻)の方から各々100万円の個人寄付をいただきました。さらに、東京ロータリークラブからは創立90周年記念として、1,000万円もの大口寄付をいただきました。このような経済状況下、学友を含め多くのロータリアンの方々からのご寄付に感謝申し上げます。上期も残り2カ月を切りましたが、引き続きご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2 2011学年度奨学金申し込み状況

2011年4月採用の奨学金(学部・修士・博士課程奨学金、地区奨励奨学金)には、指定校442校のうち401校から1,504名の応募がありました。例年に比べ、「該当者なし」などの理由から申込みのない指定校が少なく、各地区選考委員会による取り組みの成果が表れています。

申込者を国・地域別にみると、中国が62.2%(前年度比+0.3%)、韓国14.4%(0.5%)、台湾4.6%(+0.6%)、その他が18.8%(0.4%)となり、台湾がやや増加したものの、前年から大幅な増減はありません。課程別では、博士課程が24.0%(0.1%)、修士課程49.6%(+0.5%)、学部課程25.1%(0.3%)でした。また、「地区奨励奨学金」は4地区8校から計20名、「クラブ支援奨学金」には8地区12クラブから応募がありました。

11月中旬から順次、各地区へ応募書類を発送します。その後、11月下旬~1月下旬にかけて地区選考委員会による書類選考・面接試験が実施され、2月中旬には新規採用者607名(2010年11月現在)が決定します。

3 第2640地区学友会が上海でシンポジウム

第2640地区(大阪府・和歌山県)学友会が主催するシンポジウムが10月10日、上海で開催され、現役米山奨学生と学友、ロータリアンなど約100人が参加しました。

テーマは「21世紀における留学生の役割」。主催者挨拶を同地区学友会初代会長を務めた邱迅氏(上海在住)が行い、続いて米田眞理子ガバナーが奨学事業の趣旨を説明、また、上海大学および大阪府立大学の各副学長が来賓として挨拶しました。第2部のパネルディスカッションでは、学友、奨学生、ロータリアン、大学関係者らが自らの経験を元に留学生の役割について語り、参加者との意見交換も含めて示唆に富んだ議論が展開されました。アトラクションの最後は、奨学生全員が「感恩の心」という歌を手話つきで熱唱し、会場の感動を呼びました。また、7月に総会を開いた中国学友会からは張晋岩会長と楊弋涛氏が参加し、張会長が中国学友会の活動を紹介しました。懇親会后、朝10時からのシンポジウムが惜しまれながら終了し、再会を約して解散しました。(事務局長 坂下博康)



「感恩の心」を手話付きで披露する奨学生・学友たち

4 新モンゴル高校創立 10 周年記念式典に参加して

2010-11 年度 学務・学友委員 足立 功一(第 2500 地区 釧路北RC)

10月5日、米山学友のジャンチブ・ガルバドラツハさん(1998-99/山形北RC)が開校した日本式高校、「新モンゴル高校」の創立10周年記念式典がウランバートルで開催され、第2800地区(山形県)を中心とする日本のロータリー関係者とともに参加してまいりました。

10年前、モンゴル初の3年制高校として生徒105人でスタートした同校は、現在では生徒数約750人を擁し、中学校・小学校も併設する指折りの進学校だそうです。世界中の大学へ留学生を輩出しており、日本にもこれまでに150人の留学生を送り出すなど、モンゴルの教育制度を根本的に変えたと言われるくらいの実績を残している学校であります。

米山学友が母国で素晴らしい学校を設立し、大きな実績をあげていることに、米山記念奨学事業を支える日本のロータリアンの一人として、心から誇りに思いました。そして、式典を通じて、モンゴルの次代を担う若者の教育に貢献し、日本-モンゴル間の友好に素晴らしい成果を上げていることを実感することができました。これまでジャンチブさんを支えてきた世話クラブや、山形を中心とする支援団体「柱一本の会」に敬意を表すると同時に、こうした素晴らしい人材の宝庫である米山奨学事業の、なお一層の発展に向けて、微力を尽くしたいと思います。



5 米山奨学生・学友が敬老会に参加 ー第 2770 地区ー

第2770地区(埼玉県南東部)米山記念奨学委員会では、奉仕活動の一環として9月19日、越谷市内の介護老人福祉施設キャンベルホームの敬老会に参加。同地区の米山記念奨学生・学友ら36人が民族衣装に身を包み、母国の文化を紹介したり、歌や踊りを披露したほか、食事の手伝いをしながら入居者一人ひとりと言葉を交わし、交流を楽しみました。

参加した奨学生の一人、李美善さん(中国/岩槻中央RC)は「すごいことをやったわけでもないのに、私たちの手を握り、涙を流すお年寄りの皆様を見て、一緒に涙を流した奨学生もいました。今回の訪問は、人生の生き方について真剣に考える機会になりました。今を一生懸命に生



きななければならないという使命感を感じたひとときでした」と、感想を寄せました。また、グエン・ブイ・アン・ティーさん(ベトナム/八潮RC)は、「日本は長寿世界一と言われますが、元気に生活しているおじいさんやおばあさんを見て、本当に感動しました。留学生は言葉にできなかったけれど、祖父や祖母のことを懐かしく思っていたことでしょう」と、語りました。

入居者の家族からも「食事の世話をしてくださる留学生の皆さんを見て、家族のように感じた」「笑顔と涙で興奮している母を久しぶりに見て感動した」など、好評を得ました。4時間にわたる交流の最後は、参加者総勢156人での「川の流れのように」の大合唱で締めくくられました。